資料紹介

「海上挺進隊員中尾メモの公開について」

岡　本　恵　昭（平良市総合博物館協議会会長）

本資料は、元陸軍海上挺進第４大隊の隊員である中尾藤雄氏（岐阜県下尻毛在）の所有する資料を整理して公開するため特別に借用したものである。中尾氏が知人、友人を通して部隊に関係する戦時情報や記録、日記、戦時誌のいくつかのジャンルにかかわるメモや雑誌、記録を集めて筆者宛てに送付した背景には、重要なる目的と事実が秘められていた。一つには、本資料を重要で、かつみのがせない一級の戦争資料と判断すること。第２に、初めて公開される内容が事実として生に証言できること。第３に、現実に戦争史蹟としての洞窟が存在することである。そして秘匿する特攻挺を用いて、人命を賭けた攻撃作戦があったということである。荷川取海岸に口を開けた洞窟は、実にこのような戦争事実が秘されたまま消えんとしていた。船艇もろとも自爆攻撃する秘密部隊が先島宮古島に配置されていたことは、当時の他部隊にもほとんど知らされていなかったという。生き残りの戦友会の活動も、宮古島では、祥雲寺の往来と現場である部隊跡の荷川取秘匿壕を参拝するのみで、現地の人々とはほとんど接触がなかった。極秘扱いで未知のままだった洞窟は今やっと人々の知るところとなり、戦跡の由来や新たな事実が明らかになってきた。しかし、時すでにおそく、臨港道路計画によってその姿を消す運命となっている。道路は20メートルの幅で計画され、国庫助成金との関わりもあって、変更不可能な状況で進行している。洞窟は潰されるのである。この計画の決定的なダメージは如何ようにもならず、戦争遺跡を破壊してしまう外に手段はなかったのか、知識人や島人の責任が問われることになりかねない状況である。いろいろな要素がからみ合いつつ、戦争体験を風化させない努力が消えようとしている。生き残った人々が先に戦死した尊い人命に対して何の償いができるというのだろうか。死をむだにしてはいけない。特攻という非人道的な手段で死んでいった戦友に対して、私達はどうすればよいのであろうか。人命の尊厳性、平和な世界への奉仕と精進が戦争遺跡を通して叫びつづけられるものではないかと思う。「死んでいった人々はもう帰ってこないが生きている人々は何をすればよいのか」、島の人々と戦友達は〝問答〟をつづけねばならない。本資料は、中尾氏と筆者の書簡往来によって入手したもので、３カ月余かけて整理した。市の文化財保護審議会も緊急に開かれ論議した。結論は白紙に戻しての洞窟保全である。他に代わる洞窟はなく、いわれのある唯一の秘匿壕である。千円時価で造船した自爆型特攻艇なので、いわゆる「千円棺桶」と称したという。現存する洞窟を風化させることなく、事実と戦争という悲劇的な運命を結びつけ強化することも、生きている人々に課せられた重要な仕事だと考えている。記録には決死の想いを込めてメ

モした日誌があり、今、この稿で公開する。特殊なる部隊の存在、活動状況、戦闘事実、他の守備隊との関係、島人との協力関係など察しがつくものばかりである。中尾氏が奇跡的に生還し、しかもこのような貴重なるメモを残したことは、これが公開されることによって戦死した戦友の慰霊鎮魂になるのではないかという結果を期待してしてのことである。最後に、資料公開にあたって、戦友会の並々ならぬご協力に敬意と感謝の意を表します。

◎海上挺進戦隊とは（中尾氏）

1．昭和19年、陸軍の最後の切札として考えた極秘の部隊司令部は広島の宇品にあった。

2．年令は編成当時第１～19戦隊は15～18才位で特別幹部候補出身治で、20～30戦隊は各方面からの下士官の集まりであった。

3．１コ戦隊は約100名（正式な数字は104）で19年夏頃第一から順に30まで広島で編成され、書夜を問わぬ訓練受け秋頃より南へ向かって行った。これに先立ってこれ等特攻挺を秘匿にするの設営には基地隊（主に予備役）が先発した。

4．住地は沖縄各地から台湾、フィリピン各地で1700余名が戦死した。

宮古島に於ける海上挺進隊の戦争記録及び情報公開資料

― 中尾藤雄氏メモと書簡紹介 ―

①「戦隊誌」

８～９年前に作った寄せ書きのようなものです。小生はこの中に出てくる池間島沖で撃たれて亡くなった壮司の、血のりで指が判らぬ程の手を洗い宮城を拝ませたのです。皆はその時のことを盛んに書いているようですがとても書き表わすことが出来ず、いっそ固いことでなくふざけたものにしようと思い食べ物について書きました。文中に千代ちゃんと云う娘さんとあるのは、荷物をお届けしてくれました下崎の狩俣一雄さんのお母さんで、又そのお母さんは私の母位で大変可愛いがって下さいました。

沖縄食べ物談義（抜粋）

沖縄の食べ物と言っても日常の食卓に上るものではなく、ここでは戦争末期の食糧事情の悪い時の我々のことである。

今想い出してみるとよくあんなものを食べものだとあきれ返るのは小生だけではあるまい。いや隊員全部がそうだと思う。が、つらい思い出ばかりではない。座間味では阿佐の裏山を越えて東支海側の海辺で、大きな石をひっくり返すといくつもの鮑がくっついていてずい分たくさん採ってきたことがあった。時折浮遊機雷が点在する岩に接触して爆発する光景にも出逢った。島中をゆるがす様な大音響である。持ち帰っ

た鮑を宮平のおばさんが、砂糖と味噌で煮付けてくれた。この味だけはいまだに舌に滲みこんでいる。そして豆腐もおばさんの手作りであったから味も又格別である。原料の大豆が豊富にあったから度々御馳走になった。倉庫衛兵の番がくると群長が「中尾っ、今夜大豆を取（盗）ってこいっ」と。上官の命令を忠実に承って、かます（蒿で作った袋の一種）から竹のサシで抜取って何度か運んだ記憶がある。

宮古島では最後の食糧を積載した輸送船が3月1日、目前で撃沈されてから食糧事情は急変した。陽が暮れると、スコップヤ鍬をかついで出かけ、荒地を開墾してさつま芋を植えた。芋は3ヵ月位で収穫できた。

〝陽が落ちて鍬振る夏の宮古かな〟

しかし隊員の空腹を満たすに充分であるはずはない。米が欠乏してくると、つのまたで作った寒天のようなもの、砂糖そのまゝや砂糖ばかりの菓子等連日上ってきてもこればかりを何度も食えるものではない。大型のかたつむりを穴を掘って飼育していたがゴムをかんでいる様である。あざみの葉は喉を通る時、あの針がチクチクと刺激するが、根は牛蒡と全く同じで高級野菜であるが中々掘れるものではない。何と言っても新鮮な魚が一番御馳走である。海岸へ爆弾が落ちると無数の魚が浮く。水圧で内蔵をやられているから生きてはいるが動作はにぶい。素手でつかんでそのまま呑み込む。これが　所謂うのみである。呑んだあと暫らくは動くのがよく判るが、これが感じなくなったら胃袋に到着した証拠である。カルシウム源は陸上ではバッタ、海では子蟹、飯盒一杯の子蟹を採るのにはずい分時間がかかった。フグとシャケの合の子の様な魚や何種類もの雑草も食べたが一度も中毒を起こしたことはない。原始に近い生活をしていた関係で、解毒機能が生じたのかも知れない。

蛇、とかげ、たんぽぽ、又エタイの知れないこのこ等のものを誰もが口に入れた。

小生は、特に胃腸が弱かったから一時期極度の栄養失調に陥ったが、終戦となるや在庫食糧の放出によって命をとりとめた。

いつ頃からだったか記憶はないがたのしいこともあった。週番士官の巡回が夜何時位だったか、それが終ると下崎のおばさん宅へ急行。消燈から寝たふりをして待っていたのだからそれまでの時間はずい分長く感じた。しかし真暗闇の中、松林やサボテンの間を通り抜けるのは大変である、焼酎に焼いたとうがらしや、小魚のひものと大体決まっていたが、珍しいサシバの肉もいただいた様な気もする。どれ位の期間だったか殆んど欠勤？はしなかった様に思う。

千代ちゃんと言う娘さんがいたからではないが、時間のたつもの忘れて朝の点呼に遅刻して、全員が群長の話を聞いているのを、まだふらふらする頭をかかえながら松原越しに見ていたこともあったが、誰がどうごまかしてくれたのか群長も欠員に気付

かなかったらしい。さぞかし戦友ははらはらしたに相違ない。戦友はほんとうに有難いものだとつくづく思った。

家に残した母と同じ歳位のおばさんで、よく可愛がってくれたことと、あのピリっとした焼きとうがらしの味は今も時々思い出さずにはいられない。

②「戦友会名簿」

戦隊員名簿です。○印は大体いつも戦友会（毎年一回）に出席します。最初の会から一度も欠席なしは私（中尾）だけです。

氏　名	住　所	備　考	氏　名	住　所	備　考
赤星　悟	福岡県福岡市	中隊長 陸士 中尉	○国宗　彰	兵庫県尼崎市	
阿部幸三	宮城県仙台市		倉石龍雄	神奈川県横浜市	軍医　？
浅田種夫	東京都調布市	郡長 幹候 少尉	○小林浅太郎	栃木県鹿沼市	
○新井義満	埼玉県大宮市		○佐古田芳明	広島県広島市	
○飯牟礼誠雄	神奈川県横浜市		坂本道広	ブラジル	
飯室　淳	福岡県北九州市	郡長 幹候 少尉	○佐々木　仁	宮城県仙台市	
○石川達郎	群馬県前橋市		白崎善一郎	静岡県静岡市	
石川　稔	新潟県新潟市		○蝉丸伊兵衛	大阪府大阪市	
石田義晴	神奈川県相模原市		相馬　寛	北海道札幌市	
○江見　明	京都府舞鶴市		○高島博文	佐賀県神崎郡	
小野永次郎	秋田県秋田市		高田潤也	大阪府和泉市	
小畑博道	福岡県北九州市	郡長 幹候 少尉	○高橋澄夫	埼玉県上福岡市	中隊長 陸士 大尉
大古賢二	千葉県安房郡	元郡長 幹候 少尉	竹内　博	静岡県静岡市	
○大田黒　功	埼玉県大宮市	郡長 幹候 少尉	巽　正	福岡県八女郡	郡長 幹候 少尉
○金子昌功	長崎県南高来郡	戦隊長 陸士 少佐	常見京一	兵庫県加東郡	
金子佐一	熊本県荒尾市		○内藤　隆	大阪府羽曳野市（はびきのし）	
河田定太郎	岡山県御津郡		○中尾藤雄	岐阜県岐阜市	
河野元生	大分県豊後高田市		成田錦司	愛知県岡崎市	
神田米寿	愛知県津島市	比嘉米三氏義兄	浜田　豊	京都府綴喜郡（つづきぐん）	
木徳俊夫	兵庫県伊丹市		○浜本正明	埼玉県北葛飾郡	中隊長 陸士 大尉
○菊池正男	茨城県水戸市		○原田静雄	島根県邑智郡（おおちぐん）	隊長 幹候 少尉
北尾治三郎	大阪府四条畷市（しじょうなわてし）		平松行雄	宮崎県都城市	

氏　名	住　所	備　考	氏　名	住　所	備　考
藤田　勲	大阪府高槻市		杢本克己	兵庫県明石市	
○藤吉博美	福岡県嘉穂郡		○門田邦博	広島県沼隈郡	
○戸次辰雄	福岡県太宰府市		○山口　進	山梨県北都留郡	
細野　覚	広島県広島市		山田年司	北海道石狩郡	
益田靖夫	熊本県天草郡		○柳沢　大	千葉県船橋市	
○松岡三郎	愛知県岡崎市	副官 幹候 少尉	吉田一義	熊本県上益城郡	
三浦　孜	愛知県名古屋市		吉長利光	広島県竹原市	
○蓑田国雄	宮崎県宮崎市		○吉野渥美	埼玉県北埼玉郡	
村雲孝平	岐阜県加茂郡		渡辺喜代治	新潟県北蒲原郡	

（名簿作成＝新井）

③「50回忌法要現地参加者名簿」

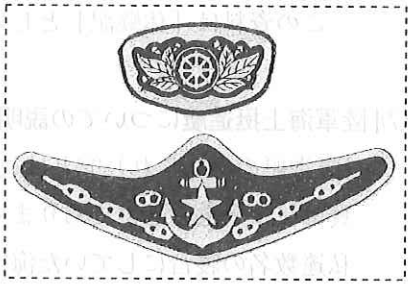
小生幹事長で初めて50回忌に30名で参りました時の資料です。これも新井君が陰の力になってくれて実現しました。（省略）

④「戦員名簿」

復員の直前に平良市内で我々で作成したものです。

－隊員名簿ですので別件資料としてとりあつかいます（筆者）。

⑤「船舶隊のマーク」

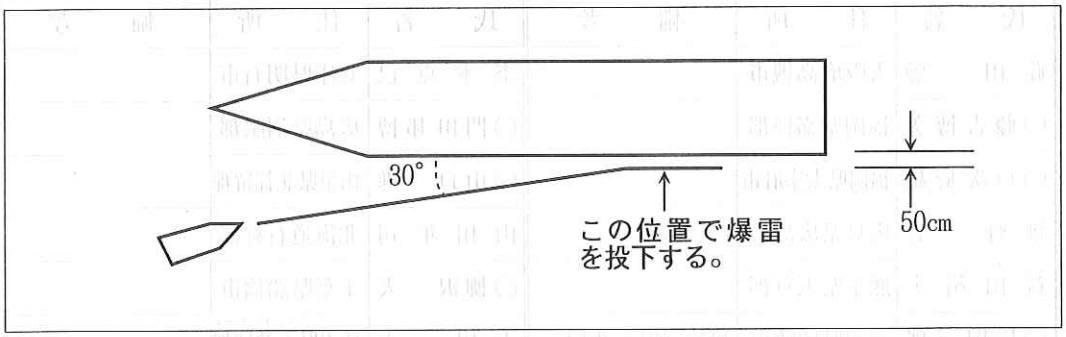


下が船舶隊のマークで船舶兵という兵科のものは全員着けておりました。つまり海上挺進戦隊第１～30戦隊まで全員です。

特攻艇とは、極秘の最後の切札であったため連絡艇と呼んだ。そのため、㋹の名で通した。

全ベニヤ板製、長さ5.6m、巾1.8m、自重0.9トン、時速23ノット。トヨタトラックガソリンエンジン搭載（75馬力）、足で操作するクラッチがあるのみ（右進も減速もない）。日本造船・横浜ヨット・川崎車輪・木南車輌・大原造船等によって製作された。19年内に3000隻程製造したらしい。

操縦席の后に250kgの爆雷（ドラム缶位）を着け、敵船団の中に入り（夜襲）艦船の機関室の舷50cmまで近づき爆雷を投下、５～７m位沈んだ処で爆発させ撃沈するの



が目的であった。

呉の軍港等で大型船に攻撃練習をしたが全速で突込み船腹と50cmの間隔を保つことは至難のわざであった。

水面で爆発しては余り効果がない。魚雷と同じく水圧を利用し船腹に大穴をあけるためこの様な危険な方法を取った。

フィリピンではかなりの効果があったが、隊員は殆んど帰らなかった。この特攻艇を作るのに当時のお金で1,000円かかったことから、又の名を1,000円の棺桶とも言われた。

⑥「従軍体験記」

新井義満著（手記）－陸軍海上挺進第４戦隊員新井君が自分の体験記録・図書館での調査・私のメモ等からまとめたものです。全部で３部しかなく、小生がその中の一冊は持っているものです故、この分だけはいつでも宜しいですから御返却下さるようお願いします。まだ今后も体の続く限り行かねばならないので、その時で結構です。

－この資料は「体験記」として貴重な資料ですが枚数の関係で掲載できません（筆者）。

⑦「陸軍海上挺進艇についての説明」

（挺進艇のあれこれ）㋹とは連絡挺の略で、こうしてごまかしていたのです。この写真は後に爆雷を着けてありますが、私の第４戦隊は途中で爆破沈没いたしましたので、私達数名の寝台にしていた海軍から貰った爆弾（100kg）を両脇に着けるようになっていました。陸軍に空母等御存じなかったと思います。小生が乗ったことのあるのは秋津丸です。全部商船改造ですので丸が付いています。又、潜水艇は昼間水中を、夜水上を、物資を運ぶために作られたもので、海軍潜水艦そっくりで、これも㊙と称して、我等特別幹部候補生出身者が乗員でした。大きな荷物室が必要（20～30ton）なため中の通路はパイプ、電線、機械類で横にならねば歩けない程せまいです。震洋は操舵席も前部も丸味を帯びていますが殆んと㋹と変わりません。

陸軍水上特攻艇 ㋹

昭和19年８月から日本造船、横浜ヨット南国特殊造船、大原造船、前田造船、木南車両、川崎車両、等で製造された。

甲４型　全長5.6m　巾1.8m　自重830kg　吃水28㎝

機関・トヨタＫＣガソリンエンジン（75馬力）　全速23～25ノット

航続時間 3.4時間　　爆雷 250kg 搭載

陸軍空母

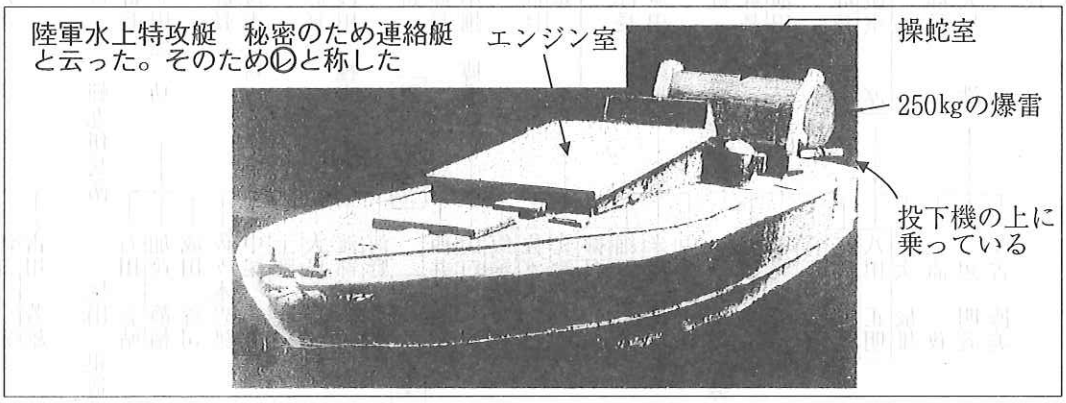
昭和17年秋津丸竣工。続いて摩耶(マヤ)丸、饒備津(キビツ)丸、玉津(タマツ)丸、高津(タカツ)丸、日向丸、攝津(セッツ)丸、熊野丸が建造された。攝津丸と熊野丸が終戦時健在であった。

熊野丸　　全長　142m　　巾　19.5m　　排水量9,502トン

5,000馬力タービンス２基　最高速度20ノット　　航続馬力6,000カイリ

陸軍潜水艇 ㊫　全長　49.5m　排水量273トン　水上9.6ノット　水中４ノット

水上航続馬力　1,600カイリ　　要員　25名



⑧「陸軍海上挺進第４大隊の組織図解説」－第四戦隊の組織・編成図

第４戦隊の組織編成です。□ワクは台湾漂着で全員帰還しています。

◎隊の構成

陸軍海上挺進第４戦隊（105名）

戦隊長　金子昌功中佐（陸士51期）

中隊長　３名　　陸士55期１名

57期２名

副　官　１名　　幹候８期

群　長　10名　　幹候10期

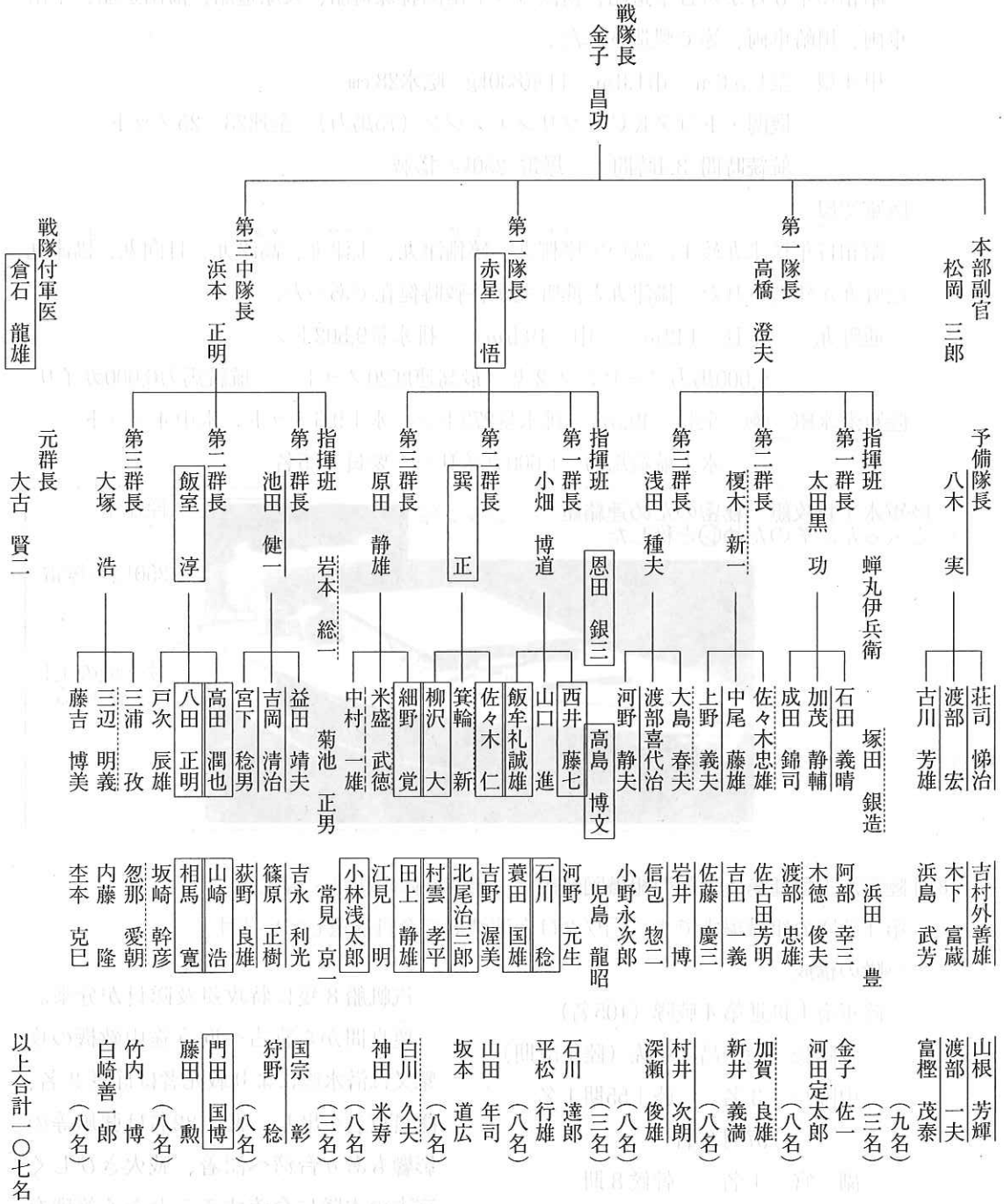
隊　員　90名　　特別幹候１期

〃　　入隊時年令　15～19才

汽帆船８隻に特攻艇及隊員が分乗。

慶良間から宮古へ向う途中敵機の攻撃又は潜水艦により戦死者は群長２名、隊員17名を出し、又、22名は強風等の影響もあり台湾へ漂着、戦火きびしく宮古の本隊に合流することなく終戦を迎えた。宮古に到着したのは64名。島で戦死、病死が４名、何とか本土に帰還した者60名。

元海上挺進第四戦隊編成表（昭和19年９月初期体制）



この編成表は、昨年から皆様のご協力によりまして、昭和19年９月当時の挺進第４戦隊を推定したものでありますが、（平成５年11月・新井作成分）さらに一部修正しましても、なお正確性を欠いているのではないでしょうか、さらに皆様のご指摘により訂正されるようにして下さい。

なお、実線は戦死者・点線は戦後の、故者を示しております。□印台湾漂着

⑨「元陸軍海上挺進隊（水上特攻隊）戦没者」

特幹出身者で編成された１～19戦隊の守備地と戦没者です。16～18才が殆んどで19才が少し居ました。入隊は１年前ですから15～18才となります。

戦隊者	戦隊長	任地	特幹隊よりの編入	戦死者数
第１戦隊	梅沢少佐	ケラマ諸島座間味	90 名	56 名
第２戦隊	町田少佐	ケラマ諸島阿嘉	〃	36 名
第３戦隊	赤松少佐	ケラマ諸島渡嘉敷	〃	16 名
第４戦隊	金子少佐	宮古島	〃	23 名
第５戦隊	近藤大尉	台湾	〃	3 名
第６戦隊	日比野少佐	フィリピン	〃	74 名
第７戦隊	内田大尉	〃	〃	82 名
第８戦隊	秋山大尉	〃	〃	28 名
第９戦隊	上法大尉	〃	〃	66 名
第10戦隊	菅原少佐	〃	〃	81 名
第11戦隊	多田少佐	〃	〃	79 名
第12戦隊	高橋大尉	〃	〃	78 名
第13戦隊	馬場大尉	〃	〃	71 名
第14戦隊	江島大尉	〃	〃	69 名
第15戦隊	小串大尉	〃	〃	78 名
第16戦隊	月井大尉	〃	〃	74 名
第17戦隊	富田少佐	〃	〃	80 名
第18戦隊	若林大尉	〃	〃	72 名
第19戦隊	井奥大尉	〃	〃	80 名
		合計	1,1710 名	1,146名

◎重要資料紹介

中尾藤雄氏メモ従軍記録抜粋（自昭和19年４月９日　至昭和20年12月21日）

昭和19年

4月 9日　22時宇品丸で宇野港を出帆

10日　早朝豊浜沖に停船　大発動艇で豊浜に上陸　10時営庭に整列

陸軍船舶兵特別幹部候補生隊入隊　一等兵（香川県三豊郡豊浜町）

12日　入隊式　司令官閣下　練習部長閣下　部隊長の訓示　初めのうちは各個教練が主で、特に手旗訓練が多かった

17日　中隊長初の精神訓話（藤嶺大尉）

19日　編成替えの後新兵舎に移動

21日　身体検査の結果、異常のある者は帰郷

25日　慰霊祭、靖国神社遥拝式

29日　天長節、野村嘱託の精神訓話（楠公の忠義）

30日　観音寺へ行軍、忠魂碑・琴弾神社参拝

5月 6日　他中隊に伝染病発生、全員防疫に努力す

8日　大詔奉載式

12日　精神訓話、野村嘱託（国体の精華）

16日　中隊長精神訓話（忠節・死生観）

17日　舟艇訓練開始

18日　最初の衛兵勤務（南門）

6月 1日　中隊長精神訓話（武勇）

4日　兵舎移転、８時小豆島に向け出帆（暁南丸乗船）

香川県小豆島へ移動

5日　上陸地点より兵舎まで軍歌演習

6日　八幡神社に参拝

9日　最初の外出、12時から17時まで

10日　部隊長　内務班の状況巡視

12日　４時起床、池田湾に向かい大発機動演習

14日　艇長として豊島に向かい大発機動演習

原区隊長の班は、敵前上陸演習の際暗礁に乗り上げ船底を破る

16日　下士官１名、候補生数名にて修理が終わった※大発動艇を引取りに行く

7月18日　司令官閣下の査閲、閣下の前で船舶兵体操を実施

閣下の訓示（河野通有の心になれ）

19日　正午より班長勤務

20日　部隊試験、試験場の準備で勉強する時間寸分もなし

21日　体力検査、身体検査

23日　完全軍装で小豆島一周の舟艇機動演習　17時橘着、露営準備、22時出帆

24日　早朝苗羽着、一日中砂浜で大発の達着訓練

27日　非常呼集、中隊300余名中岩井が一番、自分は56番

30日　外出日

31日　兵器検査

候補生隊に於ける教育終了

8月 1日　部隊兵器検査

4日　土庄小学校プールで水泳訓練

7日　5時、訓練火災呼集

12日　第6区隊に編入区隊長辰巳少尉

19日　我区隊のみ大発※で牛窓へ羅針盤での夜間航行訓練

20日　金子隊第一中隊に編入、式後八幡神社に参拝　鳥居の上に数個の石あり、中隊長が「我々の為すことはあの鳥居の上へ投げた石を乗せるより難しい」と

21日　松岡少尉の指揮のもと屋島に向かったが、機関故障のため小瀬に着く

23日　副班長勤務、班長は岩井

24日　第一戦隊の演習見学、海軍の魚雷艇を交えたマルレの攻撃演習をＳＳ艇上より見る

25日　特幹隊卒業式、夜は楽しい会食　本日付で上等兵となる　他区隊休暇帰省

27日　わが金子隊は大正丸で豊島演習基地に向かう　募金を作る　基地司令斎藤少佐の叱咤を受けつつ連絡艇多数と装甲艇2隻で昼夜を分かたぬ3日間の訓練に入る　主として操縦法、機関の故障は1日に十数件あった

9月10日　帰省休暇、大阪で途中下車　小畑に母への電報を頼む

11日　名古屋陸軍造兵廠で岩井と逢う

12日　隣近所へ最後の挨拶回り

13日　動員完結（広島市宇品町）宇品陸軍船舶練習部気付

14日　広島市電の中で浜本少尉と逢う　宮島へ参拝　映画を見てから宇品近くの老夫婦の家で一晩世話になった

15日　正午船舶練習部着　13時全員集合　15時夕食後大発で幸ノ浦に到着　兵器、被服、陣営具受領

30日　演習開始　本船の攻撃・艇隊航行等

以降　我が第二群は大発一隻を受領す　木製でトヨタの自動車エンジン二基搭載、故障多発する代物　呉近くに停泊中の空母に向けて夜間攻撃演習を行ったが、真夜中にその空母の横腹にマルレ艇をぶつけた

又群長他４名を乗せて幸ノ浦へ帰る途中、部隊長搭乗の大発の後部へ衝突５名とも海中に落ちる

自分の後ろにいた群長は私の頭の上を飛び越えて落ちたらしい　私はハンドルで打ったため鼻血が朝まで止まらなかった　營倉を覚悟していたが中隊長への報告のみで済む

10月 1日　訓練もおおむね終了　大発で江田島周辺の部落を回る　切串の学校で宿舎の割り当て、加賀・壮司と３人で石田方に世話になる

2日　室尾の奥窪方に信包・加賀と泊まる

15日　下蒲刈島向浦の谷村方で新井と世話になる　帰りに蜜柑を雑嚢一杯貰う

11月 1日　新しく舟艇を受領するため大発で宇品港へ

2日　舟艇監視９時交替のため連絡船でタイビに行き山越えをして保浦に着く　石田隊の部屋を借り受ける　当分の間、舟艇整備・艇隊航行・攻撃演習など

15日迄　江田島に於て晝夜をを分たぬ訓練

16日　午後舟艇搭載　19時出帆（日昌丸）

宇品港出航　門司、鹿児島を経由

17日　３時門司着　11時彦島着　小学校を整理　19時～21時荷物監視

18日　８時より軍装検査　９時より内務衛兵

19日　町内より布団を借りる

20日　山口県、福岡県の２名は８時より帰省　９時から16時まで舟艇整備

21日　空襲あり　防災班結成　11時20分解除　午後舟艇整備・防舷物着装

22日　午前舎内清掃　午後引率外出　映画を見る「かくて敵は撃退せり」「土俵祭り」

23日　９時より舟艇監視（川上らと５名で）

24日　大譲丸への搭載作業　20時終了

25日　30号艇、63号艇海没　雨天の中揚陸す

26日　大譲丸への舟艇搭載作業　合田兵長と本船まで甘味品受領に行く

28日　舟艇29隻本船三番ハッチへ搭載終了（15時）　19時30分出航　間もなく停船

29日　５時出帆　波高し　17時より退避訓練　この夜は長崎沖付近で停泊

30日　４時出帆　海防艦３隻　飛行機２機護衛　我船団7,000頓級輸送船数隻で航

行　午後体操･手旗訓練　夜は天草沖で停泊

12月 1日　早朝出帆　午前モールス練習　20時鹿児島入港

2日から5日　鹿児島湾で停泊　毎日軍歌演習・モールス・手旗・体操の訓練に明け暮れる

6日　昇降口の屋根作り　15時出航の予定が潜水艦情報により延期

7日　潮の飛沫で錆びたため軍刀の手入れ

8日　正午より大詔奉載式　7日頃から敵潜水艦至近距離にあるため警戒

9日　14時から衛兵　15時鹿児島港出帆　駆逐艦2隻護衛　我が船団17隻

11日　波高く気分が悪い　14時対潜警戒に入る

12日　ケラマ泊地で停泊

13日　風雨強いため舟艇の破損箇所点検

14日　5時起床　2・3番ハッチの舟艇を下ろす　14時終了　15時大発で阿佐東方の海岸へ上陸　16時大譲丸出帆　当夜物品監視

ケラマ座間味島に上陸　同島守備

15日　○時から4時糧秣運搬　阿佐の宮平方に落ち着く

16日　26日まで各種教育訓練

21日　宮古島上陸（本隊のみ）　終戦迄同島守備、晝間は教育と就寝、夜は狩俣方面の荒地を開墾してさつま芋を植え、自給自足の生活　マラリヤ続発

27日　倉庫衛兵

28日　座間味へ充電のためバッテリー運搬

29日　バッテリー受領　機帆船に物資搭載

30日　午前座間味へ食糧運搬

31日　環境整理　午後薪取り

昭和20年

1月元旦　8時半より拝賀式　9時より舟艇監視

2日　休日　午後第一戦隊と野球試合　優勝

3日　糧秣を本船に積み込む　入浴当番　18時部落の人達と会食　演芸会

4日　舟艇整備　薪取り　魚貝類の採取

6日　10日まで毎日使用する薪を取る　頭の上に乗せてみたがとても部落の婆さんの真似はできない

11日　群長の命令で倉庫から持ち出した大豆で作って貰った豆腐は格別の味である　裏山の向こうであわび取りの最中、時折漂流してきた機雷が爆発、すごいこだまがする　夜はあわびの味噌あえ、この味も最高

12日　8時より舟艇搭載　休止期間が長かったせいか　中隊長、群長、自分の3艇

しか始動しなかった

13日　９時より各舎の清掃

15日　大発で本船にドラム缶搭載

16日　衛兵勤務　阿佐部落の祭り

17日　家の手伝い　米搗きに使う杵は童話の兎の使うものと同じ　午後座間味へ糧秣受領

18日　午前薪取り　午後炊事場で米搗き　宮古島へ移動の準備完了　21時91興国丸に乗船

19日　３時出帆　風波強い　10時久米島に一時停泊　川上と同乗

20日　９時久米島出帆　機帆船団はＳＥに進路を取る

21日　昼頃になっても島が見えない　ＳＳＥに向かう　他の船はＳへ　15時島影発見　海図を見ながら水深を測定したが全然合致せず　竹丸が敵機の銃撃を受ける

22日　夜が明けて石垣島と判明　14時石垣港に入港　夜通し風が強い

24日　風雨強し　船中で過ごす　他部隊の下士官・老二等兵と同乗　夜中に錨が切れ石垣港外へ流される

25日　昼頃伝馬船で軍曹が二人来てすぐ宮古島へ回送するようにと

26日　又も回送の連絡　他船へ移る

28日　風強し　又錨が切れた

29日　風雨更に強し　沈没の恐れあり

30日　午後天候回復　発電機の手入れ　船員は水の補給

31日　12時出港　かなり波が高い　真上をグラマン通過　15時宮古島が見えた　21時平良港北２・３浬で停泊

2月 1日　波静か　９時出航　14時平良港第三桟橋へ上陸　兵舎に到着

2日　午前舟艇整備　午後被服検査

3日　午前モールス練習　午後礼式令学科

5日　８時半より機関短銃操法訓練　10時敵Ｂ２４来襲

7日　９時より衛兵

8日　冬服受領　13時よの米英軍常識に関する学科

14日　８時半出発・荷川取兵舎に移転　午後当番小屋作り

15日　爆雷投下機の取り外し

情報＝敵は18日頃上陸の見込み

16日　燃料補給　16、18、19、21の４艇を第二陣地へ回送

17日　爆雷投下機及び舟艇の整備

19日　各艇のモビール取換え

21日　休養　午後天水にて入浴

22日　午前発電機の手入れ　午後毛布・被服の乾燥

23日　二隻の大発で池間島西方海上へ航路偵察　直ちに対空監視に立つ　正午頃西方上空に飛行機らしきもの発見報告　間もなく敵機発見として報告　コンソリデーテッドＢ２４なり　直ちに降下　銃撃及び爆弾投下を開始　二隻とも航行不能となる　全員池間島灯台下の岩陰に泳ぎ着く　荘司が脚を撃たれ出血多量で心配　大勢負傷　加賀は右腕全体に重傷　浜田は横腹　川上は足の甲　佐藤は後頭部に負傷　血のりがベッタリついた荘司の手を洗い宮城を拝ませた

24日　午前舟艇整備　荘司は遂に助からなかった　16時から祥雲寺において５名の告別式

27日　午前手旗訓練　午後舟艇整備

28日　着くかどうか判らぬ手紙を書く

3月 1日　午前舟艇整備　早朝グラマン二機　昨夜入港の輸送船を銃撃　偵察ゆえ急遽対空準備　16時より約１時間グラマン約30機及び雷撃機数機で湾内に停泊中の輸送船２隻及び海防艦を攻撃　１隻は油と弾薬を搭載　燃え続ける煙で島全体が薄暗い　他の１隻は食糧と兵員搭載と聞く　空中魚雷により目前で豪沈最後の食糧もここまで来て実に悔しい　海防艦は魚雷を避けて沖を逃げ回っていたがどうしただろうか

2日　　情報＝南東約300粁に敵機動部隊近付く

戦闘準備　服装を整え待機　先日多良間島沖でグラマンの集中攻撃を受け戦死した池田少尉以下の告別式を16時より祥雲寺で行う

渡辺（喜）一人不思議に生還

3日　空襲連続　爆音絶えず　グラマン・コルセヤー・スピットファイヤー・Ｐ３８の戦闘機、アベンジャー艦爆など多数　上陸近しか　18時半より17・22・23・24の４艇を第二陣地へ移す23時終了す

4日　各舟艇の擬装を行う

5日　午前舟艇整備　午後空襲の合間を見て水泳

6日　午前舟艇整備　午後入浴

7日　本日より５時起床　30分で戦闘準備完了すること　午後ラグビー

8日　７時大詔奉戴式　午後焚き火で蕷を焼きながら雑談モールス練習　モールス

は自信があったが渡辺（忠）に及ばず

9日　食糧欠乏　中隊ごとに荒れ地を耕す　11日まで（炊事場南側）

12日　1時45分野戦病院で佐藤死亡　19時野火の準備完了　川上と衛兵に付く　夜食を済ませた頃二群全員が来て骨を拾う

13日　午前草刈り　豆蒔き　午後水汲み　16時より佐藤の告別式

15日　16日とも農耕　主に夜中行う

17日　各艇の始動実施　午後入浴

18日　午前アダンの根で草履作り　午後海に潜って貝取り

19日　体操　手旗訓練　舟艇整備

22日　午前　中隊長精神訓話

24日　7時半コルセヤー・グラマン15機平良港爆撃　砂糖工場爆破され一面砂糖の海となる

26日　8時防護警報発令

27日　5時より甲号戦備演習　装具を第二陣地へ運ぶ　8時15・6機　10時及び16時約40機伊良部飛行場・平良港を爆撃

28日　陣地擬装及び舟艇整備

情報＝二・三日前敵舟艇約百隻・兵力1,500位が慶良間諸島に上陸

第一戦隊と島民たちが心配

30日　舟艇等整備　B29が一機偵察飛行

情報＝現在本島を有力な敵艦隊及び航空部隊が近接包囲し砲爆撃しつつあり　駆隊艦は沖約1,000米まで近付き艦砲射撃中なり

北方から雷のような連続音が聞こえてしる

31日　午前学科　モールス練習　午後体操　農耕　何回もグラマンが飛行場と港を爆撃

4月 1日　早朝久し振りに友軍機飛び立つ　特攻機か　午後身体検査　腸の調子悪化　練兵休をとる

2日　朝　敵数機港を爆撃　午後農耕

3日　午前タコ壺掘り　12時半頃食事中を爆撃され洞窟に退避　本日の敵機来襲約300機

4日　環境整理　敵機来襲少数

5日　タコツボ掘り　5時半から17時まで敵機約200機来襲　炊事場所近に小型爆弾2コ投下

6日　タコツボ掘り　敵機数回爆撃

7日　6時半頃より敵機5・60回来襲

8日　5時半より敵機数回海岸線を攻撃　上陸の準備か
夜になっても照明弾とロケット弾の攻撃を受ける
18時半より大詔奉戴式

9日　5時半頃よりカーチス・グラマン100機位が10回余に及び平良町と飛行場をロケット弾・時限爆弾で攻撃　町は数箇所で炎上

10日　雨　洞窟掘り続行　暫く農耕続く

27日　午前衛生法・救急法　午後機関学科

28日　午前戦闘計画　午後内務検査

29日　6時半より遥拝式　7時から16時まで群長・川上と三人で野戦病院の加賀を見舞う　洞窟の中で寝ていたがあの傷ついた手は回復するだろうか　帰りは特に激しい空襲で時間がかかった

5月 1日　午前海洋気象学　午後舟艇整備

2日　舟艇に清水（真水）通しを行う

3日　午前舟艇整備　午後機関学科　16号艇分解整備　夜手探りで薩摩芋の苗を植える

4日　午前海洋気象学海図等　午後機関学科　11時45分から12時15分まで　西方海上に敵Ｂ２、Ｃ５、Ｄ５他６通過するかに見えたが　横隊で我島に艦砲射撃を行う　乙号戦備発令　主に飛行場を砲撃　約30分間の主砲弾の数約380発（この数は２群の洞窟の上の台地で確認したもの故正確である）

5日　6時乙号戦備解除　午前軍隊内務令　午後舟艇整備　入浴
情報＝４月18日から27日までの那覇付近の戦果次の如し　ＢまたはＣ１、Ｃ４、Ｄ２不明　15撃沈　Ｄ２、大型Ｔ１、Ｔ５不明　16大破　水上特攻隊によるものＤ２、Ｔ３、大型Ｔ２、不明　１撃沈　神風特別攻隊によるもの　Ｔ４隻を撃沈

7日　グリス・オイルの注入及び錆取り20時まで農耕

8日　環境整理　午後舟艇整備

12日　農耕　病床の上野の看護にあたる

14日　舟艇整備及び擬装　14時まで防毒面の手入れ、バッタ取り

15日　午前環境整理　芋苗取り　午後農耕
情報＝名古屋へ敵機４百機が来襲焼く夷弾投下　九州の飛行場に５百機来襲

16日　午前戦闘計画　機関教育　入浴

18日　防毒面の操法　午後入浴当番水汲み

19日　午前内務整理　11時30分第３洞窟落盤負傷者あり

20日　身辺整理

21日　長雨のため被服の乾燥

23日　午前戦闘計画テスト　午後農耕　一部で小屋を作る

28日　午前甲機関の分解手入れ

情報＝本島の北・中飛行場は友軍が完全制圧　敵空母等10隻余の大部隊は我が特攻機により退散

29日　午前機関の分解の手入れ　午後貝取り　アナゴ３匹捕らえる　農耕

30日　海図の説明　貝取り　農耕

31日　舟艇整備　貝取り　農耕　第一陣地へロケット弾落下　落下点まで数メートル　食事当番

6月 1日　対日行動学科　小屋作り　付近の陣地爆撃される

情報＝明日未明より９時にかけて敵落下傘部隊来襲の公算大なり

2日　兵器検査　乙号戦備発令

3日　休む　環境整理　豊部隊付きとなる

4日　電気系統、燃料系統整備　16時より農耕除草

雨強し　久し振りに敵機来襲なし

5日　舟艇整備　16時より農耕　22時30分非常呼集

6日　４時起床　午前休む　午後舟艇整備

情報＝敵艦船800隻以上南大平洋にあって北上中

8日　９時より大詔奉戴式　午後精神訓話（必勝の信念）

10日　本日より大隊炊事となる

情報＝敵輸送船等150隻沖縄本島付近にあり

敵首里南方４粁に迫る

５月中の本土来襲敵機数5,800

17日　除草　腸の調子悪く三食絶食　19時診断を受ける

18日　舟艇整備　島尻の農耕一時中止

情報＝敵機動部隊は宮古島東南方より接近しつつあり　我が部隊は艦砲射撃に対応する準備をすべし

19日　舟艇整備　夜は島尻に防空壕を掘る

情報＝友軍機の偵察によれば、Ｂ２・Ｃ２・Ｄ10・Ｔ12隻が東方150粁に、又北北東に輸送船団あり、厳戒を要す　なお島民に知らすべ

からず

20日　那覇玉砕　機関の手入れ　夜農耕

25日　舟艇整備　24時より１時間月食あり

情報＝中国・四国・東海地方にＢ29　380機来襲爆撃

28日　舟艇整備　朝敵20機来襲　11時敵飛行艇マリーナの偵察　午後戦闘計画　夜農耕

30日　午前礼式令学科　10時半湾内で魚取り

情報＝久米島敵に上陸される

7月 1日　集団長視察　午後濾水器作り

2日　舟艇整備　近日中に加賀が台湾に移送につき準備　23時より農耕

3日　７時より壕掘り　爆音少ない　火薬（敵の時限爆弾から抜き取ったもの）をビール瓶に詰めて魚群を待つ　１回の爆破で２，30瓩の鰯が取れる　数量が多いので箕で掬う

8日　休む　干潮を見計らって貝（毒がありそうでも）、魚・かに・つのまた・たこ等何でも捕らえて食う　糧秣益々深刻

10日　午前退避壕堀り　午後厠作り

12日　８時より身体検査　３月と比べ体重５瓩身長糎減少

16日　午前藷苗移植　午後舟艇整備　15時マリーナ低空で偵察飛行　友軍の対空砲火なし　弾薬尽きたか

18日　８時より三種混合予防注射　就床

21日　８時より藷苗取り及び移植　15時30分頃石垣方面より敵15機池間島上空通過

情報＝水戸・釜石付近艦砲射撃を受ける　2,000機が釜石空襲　内250機撃墜とのこと

22日　農耕

情報＝付近に在りし敵輸送船団南下中（20時）

24日　８時より16時間まで島尻農耕　18時頃我が部隊の舟艇二隻が始動中誤って漏れたガソリンに引火　爆雷破裂　二艇を失う

27日　８時より17時まで農耕　12時頃マリーナ超低空で強行視察

28日　農耕　かたつむり採取　一部を飼育　飼料はさつま藷の葉　食糧全く欠乏　たんぽぽに似た苦い草、喉の痛いあざみ等何ともうまい　あざみの根は格別美味　とかげは最高であるが足が早いため捕獲できない

30日　農耕　魚取り　いかに手を食い付かれる

8月 1日　軍曹及び伍長に任官　兵器・被服の手入れ　17時より隊長に任官の報告　19

時より３時間会食

4日　農耕（雨）　20時から野営

情報＝清水市艦砲射撃を受ける

5日　午前農耕　午後休む　最近砂糖、寒天（つのまた製）がほとんど主食　薩摩藷の葉とつるの塩汁（海水）は固くてまずい

情報＝今月中に敵機8,000機那覇に集中する予定とのこと

6日　午前舟艇整備　15時より藷掘り

8日　大詔奉読式　午後草刈り　19時より本部へ集合　演芸会

10日　木材受領　先日切ってきたパパイヤの木を乾燥したのが青白く黴(かび)た。もう食糧にはならぬ

13日　隊長訓話（陸軍大臣の布告）　舟艇整備　午後農耕

情報＝先月27日三国（?）が申し入れ

今月８日ソ連が我が国に対し宣戦布告す

14日　農耕

情報＝ソ満国境は困難　広島と長崎に原子爆弾という新型爆弾が投下された　マッチ箱位の火薬で大きなビルが吹き飛ぶとか　全く信じられぬ

16日　２時非常呼集　中隊長から戦争終結の詔書を聞く

19日　７時30分より大詔奉戴式　午後休む

20日　午前農耕　午後家屋を建てる　藷掘り　４名入院

22日　午前農耕　14時30分より合同慰霊祭　15時30分より5656部隊の演芸会を見学　24時帰営

23日　兵舎作り　17時より暁部隊の演芸会見学 23時帰営 本日より東側兵舎に移転

27日　午前農耕　挙銃返納　午後全員移転

28日　８時まで艇を泛水　12時半まで整備　14時半より分列式　16・18・21・23号艇参加　他の４隻は他部隊へ配備

30日　午後水源地付近の林から出火

31日　午後三名退院　缶詰の放出等あったせいか体力がだいぶ回復した様に思う

9月 1日　群長以下４名池間へ　風雨強いため帰れず　海岸の舟艇引き揚げ

2日　風雨強し　大浦より池間へ糧秣運搬

3日　風雨強し　未明上野死亡

4日　農耕　18時より祥雲寺で上野軍曹の告別式

7日　午前健康診断　14時より舟艇を乗り回す

8日　午前農耕　P38低空で飛来

10日　午前休む　午後茄子・白鳳豆を植える準備

13日　午前藷掘り　午後船台を舟艇で第五桟橋へ運ぶ

14日　舟艇返納　成田と本部へ骨受領

15日　休む　18時より演芸会

24日　米軍のT、C各一隻入港

25日　米軍我が兵器類を処分

28日　8時米軍司令官（キャノン代将）閲兵

29日　三中隊とバレーボール試合

30日　台風　休む

10月 1日　西側兵舎整理　毎日環境整理・農耕

7日　午後発煙運搬　15時より野球

17日　草履の材料のアダンの根の採取

27日　氷会社で機関整備（8時から17時）

11月 1日　このところ毎日衣食住に関する作業及び整理

24日　午前診察　19時半より会食 米軍C、T入港 米兵にタバコを貰い皆に分ける

25日　米軍C及びT入港

30日　狩俣の三枝中尉のところへ中隊長と遊びに行く　先日の舟の修理のお礼とのこと　中隊長の鼻は大分高かった様子

12月　毎日帰還の準備

10日　乗船命令下る　乗船準備　20時出発準備完了　番号註記　携行証明書印刷　本部伝令及び中隊長荷物運搬

11日　3時出発　トラックで6時半小学校に到着　9時リチャードヘンリー号　15時乗船（二番ハッチ）

12日　6時出帆　船内は大変暑い

16日　朝伊豆半島及び諸島が見えた　20時浦賀着

17日　19時浦賀上陸　19時半より徒歩及び電車で旧兵舎に入る

18日　環境整理

19日　被服返納及び受領　夜の会食で部隊長の酒を全部戴く　24時消灯

20日　6時起床　後発として10時出発　トラックで横須賀駅着　13時半出発（東海道本線へ）　途中マラリヤで高熱を出す　24時頃岐阜駅へ到着　雪の中二時間ほど要し徒歩で帰宅

「大発ーダイハツ」の略称について

「大発」＝「大発動艇・大発艇」排水量10t・長さ約15メートル・幅約４メートル。
これに対し小さめの小発・中発がありました。

※文中にある大発は排水量20tonで武装兵70名、又は貨物10t、或は軽戦車一台と兵20名を乗せる敵前上陸専門の舟です。20年２月23日池間島沖で米軍機の攻撃にあったのもこの種の舟でした。私の記憶は薄らいでいますが、文中に敵艦ＡＢ等とあるのはＡ＝空母、Ｂ＝戦艦、Ｃ＝巡洋艦、Ｄ＝駆逐艦等の意味です。情報との文字が入っていますが、別紙にありますレーダーが余りにも鋭敏なため遠くの潜望鏡も据えたと聞いており刻々潜水艦情報等が入ったと思います。

資料１

「宮古毎日新聞」1996年６月23日

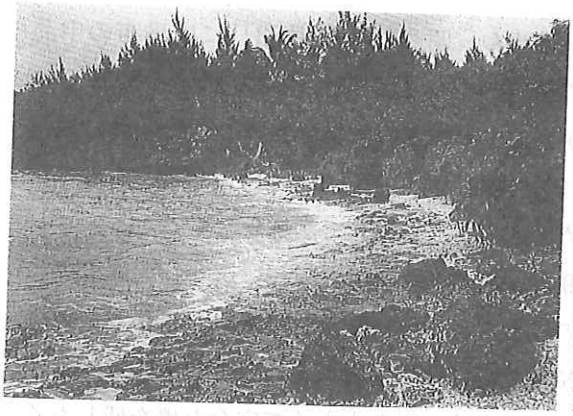
宮古にもあった海上特攻隊 ― 平良市荷川取に壕跡 ―

太平洋戦争が終結してから51年を迎えた23日の「慰霊の日」。当時、宮古には60年の隊が駐屯していたが、その中で秘密指令を受けたがためにその存在がほとんど知られていなかった部隊があった。陸軍海上挺進第４戦隊は、海の特攻隊としての任務を帯びていた。23日、同隊員だった岐阜県岐阜市在住の中尾藤雄氏（70）が宮古を訪れ、当時の隊の様子などを明らかにした。

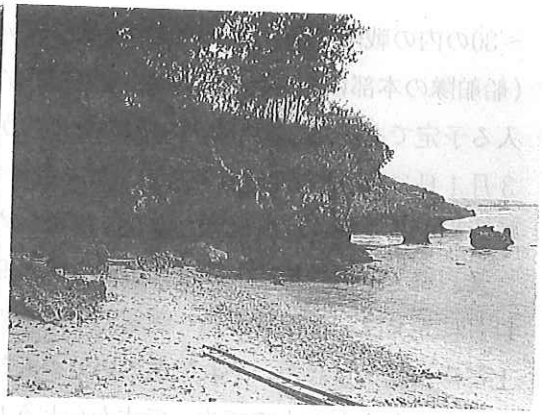
中尾さんの1944（昭和19）年12月に宮古島上陸した。途中、攻撃にあい19人が戦死し、22人の乗った船が強風で台湾に漂着するなどし、宮古に到着したのは64人だった。任務はベニヤ板で造った長さ５メートル余の船に250キロの爆雷を積み、敵艦に近づいて投下し、爆発させるもので、「自爆覚悟」だったという。

結局は行われなかったが、翌年12月までの間、戦友のうち４人が戦死したり病死したりした。中尾さんは、戦友６とともに、現在の平良市荷川取漁港地先の埋立地の洞窟で出撃を待っていたという。慰霊の日の翌日14日は、元第28師団通信隊の霧生藤吉郎氏とともに同所を訪れた。昨年、中尾さんは洞窟入り口に隊員の名前を書き込んだゆかりの看板を立てた。

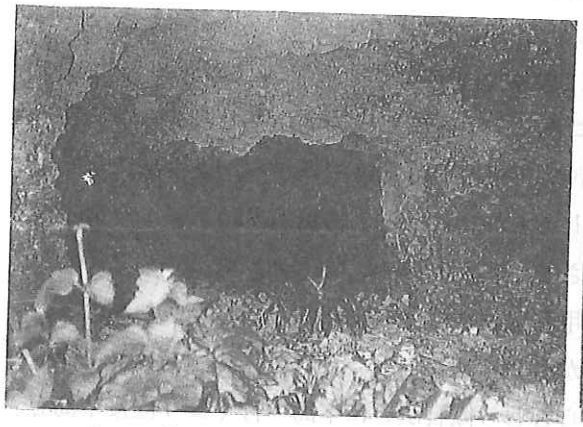
この中で中尾さんは「当時は秘密部隊のため自給自足だった。生きて帰れるとは思っていなかった。平和な世の中で過ごせるのも戦友のおかげ。慰霊碑を建立したいと考えている」と語った。（平成８年６月23日　宮古毎日新聞より）



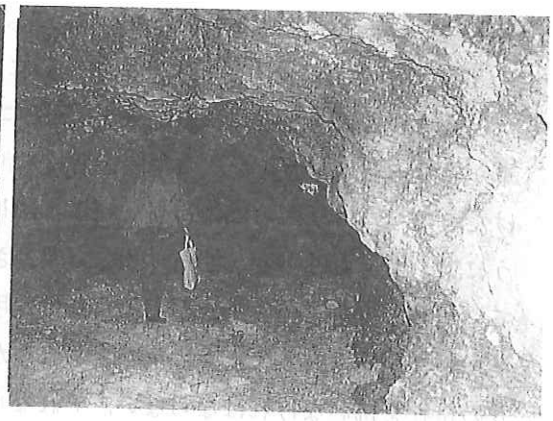
△中央位に見えるのが４人の写真の洞窟です
特攻艇の出口（Ｓ54年３月撮る）



△反対側（北側）にある入口、現在は近づくのもやっとです。まだ特攻艇を乗せたトロッコの線路がほうり出されたままです（Ｓ54年３月）



△入口、出口の間（といっても入口に近い）に窓用の穴がありました。両側から撮った処です。現在僅かに上の方が空いている位です。



△洞窟の内部（中央当り）

資料２

岡本様

前略失礼致します。昨年暮には大変お世話に相成りました。隊員一同厚く御礼申上げます。

資料等と言えるものではありませんが、少々お送り致します。何かの参考に少しでも役立てればと思います。

先日、下地康夫先生からいただいた貴重な『宮古の戦争と平和を歩く』の冊子を読ませていただいています。ずい分多数の洞窟が竝んだのを対岸から見せていただきましたが、海上挺進第30戦隊は我々の特幹部隊出身（第１～19戦隊）と違い各方面から集められた20

～30の内の戦隊で余り詳しいことは判っていません。昭和19年10月28日に広島市の宇品（船舶隊の本部にある処）で編成、戦隊長は富田稔少佐、我が第４戦隊と同じく32軍下に入る予定であった。20年２月に広島を出たが、途中米艦隊の攻撃をさけて奄美大島に退避、３月１日に200機余りの艦載機の攻撃を受けて貨物船（７～８千トン位）に載せてあった特攻艇を多く失い、戦死者もかなり出たため、広島へ引き返して訓練をしていた。

又、海上挺進基地30大隊は久留米で20年９月に編成された。大隊長は藤倉長太郎少佐。11月に先発隊一部が宮古島へ到着して基地の設営に当った。しかし、戦隊が来ないため陸上部隊に編入された。それであのいくつも竝んだ壕には特攻艇を入れたことも特攻隊員が入ったこともないものです。ですからどうしても私達の居た大きくて完全な壕を残したく、陳情上げた次第です。

私達は特別幹部候補生（船舶兵）として志願し、教育隊を出して特攻隊に廻った者で幹部を除き90名で１コ戦隊が編入されました。

「宮古の戦争」にありますレーダーのことですが、私の聞いた限りのことを申し上げます。米軍の世界一と言われた電探が比島のコレヒドール要塞に設置されていました。日本軍が上陸占領した時之を一番危険出ある（沖縄で最も早く上陸占領する）宮古島に備え付けたもので、外部からは絶対判らぬようにしてありました。以物が山の頂上によく判るようにアンテナだけ設置してありましたが、さすがアメリカのこと、本物のある所はよく知っていたそうです。今に米軍が占領したら使用しなければならないので之を破壊しなかったと言います。宮古への上陸は７回企図したが、勿論守りも固く、軍民の数も多いのでかなりの犠牲を拂わなければならない。それならむしろ佩石伝いに本島へ行くより直接本島を攻撃した方を選ぶべく、先づ停泊地（船団の）に適し、砲火も持たないケラマを占領したと思います（これは主に米軍が友軍に打落されたパイロットの少尉から聞きとったもの）。以上あまり根拠のないようなもので申し訳りません。

第４基地大隊の丘の上の碑については横浜の藤田御住職に折を見てたづねたいと思います。

私でお役に立てることならどうかお申し付下さい。出来る限り協力させていただきます。

昨年宮古から帰って数日後から手のしびれがひどく最近特に目立って病状が進んで来て、一日に何回も湯に着けています。字を書くのも手袋着用で時々ストーブで暖めている状況です。このまゝ進みますと遠からず手が使えなくなるのではと心配しておりますが、戦友達の代表としてまだ色々仕事がありますので、がんばるつもりです。

このような訳で私の字は読みにくいですが御了承下さい。

では又色々御世話になりますが今後共宜しくお願い申し上げます。　　不一

中尾

資料３

岡本様

前略　いつもお世話になります。

基地隊の碑の件、終戦の年の11月、大隊長の西江重樹大尉指揮の元、生存者全員で丘の上まで苦労して運んで建てたとのことです。何日かは判りませんが復員直前です。その当時ですから磨いたものではなく、尺切割っただけの石に刻んだそうです。その後いつ頃か大隊長が基参に行ったが、草木が覆繁って見つからなかったとのこと。そして情報では撤去してそんなものは無いと市の方で言われた処、私がその写真を送ったのでびっくりしたと言っておられました。

以上證言

横浜市中区桜木町３－５　宝光寺住職　藤田恭順師　元中尉、大隊長副官

Ｔｅｌ　０４５－２０１－３５０９

大変お元気なお声でした。今秋第４戦隊会を鎌倉で行います。（新井幹事）ので霧生氏と共にお招き致したく存じます。第４基地大隊の御健在の方、判る範囲でお知らせ下さる予定です。

あの碑は建てゝから一度も誰も参拝していない様です。

私の大切に保存しています陣中メモお送りします。何分洞窟内の石で削った鉛筆で薄暗い処で取ったメモ故、又編上靴の底に入れて米軍の検査で見つからぬようにしたものと50年以上もなりますので、殆んど読めない状態ですが、復員して間もなく写し替えておきましたので記録として残ったのです。然し生きて帰えるつもりは更に無かったのですが、勝つことを信じ、小生亡き後、誰かが見つけてくれたらと思い膚身離さず持っていました。

若米軍に取られたらとの理由からとの軍の機密に関することは一切書いてありません。第１～第30戦隊員約3000人余の中でこんなメモを持ち帰ったのは恐らく私だけと思います。

先便で第１～19戦隊までの戦死者数の一覧表をお送りしましたが之は我々特別幹部候補生上りの者だけの数字で幹部は含まれていませんが、別表の第20～30戦隊は一部分に我々と同期もいますが大部分下士官のようです。ですから平均して５～６才年長の方が多いです。この20～30戦隊についての戦死者は１～19戦隊の先便の表とは違い、隊全体の数字です。いずれにしても1000人余りのうち385名が戦死しています。沖縄本島、ケラマ、比島では切込隊（決死隊）が毎夜食料及び小銃等を奪うため、米軍キャンプへ出かけ３分の１位が何とか生き帰ったといいます。そしてその食料を食べその銃で戦い、それがなくなると又切込を繰返したそうです。比島では大とかげが日本兵の倒れたのを群になって食っているのを捕まえてその肉を食い、戦死すると又とかげに食われの日々だったと言います。

いずれにしても宮古ではテレビ新聞等で或程度の方はお判り下さったのですが、本土では一万人に一人も我々のことは知りません。話をしかけると、あゝ回天かとか震洋かといいますし、最初に出る言葉は海軍でしたかです。特攻隊員の1500余名のためにも全国に存在を知っていただきたいのですが、もうどこにも健在で特攻艇が何隻で番号がどれだけで誰が居た等判るのは我々のいた隊のみです。何等かの形で残していただきたいと思います。

私現在半病人で快方に向かえばの話ですが、この㋹なる船別名1000円の棺桶を復したく考えています。そうすれば大勢の基地隊の犠牲者を含め、我々隊員1500余名の霊も浮かぶのではと思います。

昨夜は特に大勢の戦死した隊員と見られる霊が現れました。その顔が余りにも悲壮で何度か眼を開きました。又目をつむると見えるのです。

色々御手数をおかけしますが何とぞ宜しくお願いします。何かお知りになりたいことで私に出来ることならさせていただきます故、お申し付け下さいます様重ねてお願い申し上げます。

不一

中尾

資料4　元海上挺進隊各部隊戦没者－別表－

第20～30戦隊戦没者（一部特別部隊で各部隊より集められた）

戦隊名	任　地	戦隊長名	戦死者数
20	台湾	佐田大尉	7
21	〃	林　大尉	11
22	〃	吉沢大尉	35
23	〃	御尉大尉	2
24	〃	福田大尉	8
25	〃	多々良大尉	1
26	沖縄本島（糸満）	足立少尉	90
27	沖縄本島（那覇附近）	岡部少佐	80
28	沖縄本島（那覇附近）	本間少佐	86
29	〃	山本大尉	55
30	広島～回送（宮古予定）	富田少佐	10
合計			385
1～19戦隊			約1200名

資料＝㋹の戦史より　編集主幹＝儀間保氏

資料5

岡本様

前略　先便で落した分で私達7名の居た壕に入れてあった8隻の特攻艇の番号及搭乗員をお知らせします。不要かも知れませんが次の通りです。

2	16	不明	
〃	17	佐古田芳明	広島市東区上温品　健在
〃	19	不明	
〃	21	中尾　藤雄	岐阜市下尻毛　健在
〃	22	新井　義光	大宮市中川　健在
〃	23	不明	
〃	24	不明	

1戦隊からイロハ順で4戦隊ですから番号の先に2がついています。番号は戦隊毎に1から約95まであり○○号艇と呼んでいました。

不明者	吉田　一義	熊本県矢部町　健在
〃	佐々木忠男	仙台　戦後死亡
〃	加賀　良男	愛知県蟹江町　戦後死亡（宮古で重傷）
〃	上野　義夫	福岡市志賀焦　宮古陸軍病院で戦病死
〃	佐　慶三	室蘭市　宮古陸軍病院で戦傷死

訂正のお願い

小生の従軍記録の内5月4日の英艦隊の艦砲射撃の処で艦の数が足りません。メモの一番上にしてある○印の部分に見られるようにD5が抜けています。訂正して下さい。そうすると宮古の戦争と合致します。

B	B	
2	2	
C	C	B－戦艦
5	5　になります。	C－巡洋艦
他	D	D－駆逐艦
6	5	
	他	
	6	

そして宮古の戦争には511とありますが、恐らく間違いと思います。私等は敵艦船を静めるのが目的で訓練や労科に励んで来ましたので先ず駆逐艦を他の艦と間違えることはな

いと思います。私の見た限りでは大分小さいのから海防艦位まで6隻と見ましたが、或はそうでなかったかも知れません。なぜ小型艦艇が共に行動するかと言うと、小廻りが出来るからです。若し平良港（当時）の近くに入ろうとしたら駆逐艦では無理です。新井氏の編集したのは本人の了解を得ていません。あまり人に見せたがらないとようで、3冊しか作らなかったと思います。御承知置き下さい。

陳　情　書

戦後漸く50年余を経過しましたが、あの苛烈な戦禍により壊滅的な被害を受けた宮古島の皆様が平良市を中心として見事な市街地を形成し、立派に立ち直っておられる姿を拝見したとき、私共かつて御地に骨を埋める覚悟で駐留した者にとりましてこの上ない感激でございます。

顧みますとあの当時、沖縄本島を初めとした沖縄県下の島々が筆舌に尽くせない辛酸を嘗められたことは、本土の人達の誰よりも私の知るところでございまして、今日の基地問題につきましてもその明るい進展を心から願っております。同時に、沖縄県下の各島が亜熱帯という本土に無い恵まれた気候と、珊瑚礁に象徴される風光明媚な土地柄を活用されて、観光を初め産業面で今後益々発展されることを衷心から期待申し上げます。

さて、私共の部隊は、昭和19年という終戦直前の時期に戦局の打開を目指して急遽編成された旧陸軍の極秘の隠密部隊でございました。一人乗りのベニヤ板製のモーターボートに240瓩の爆雷を着け、敵艦船を攻撃するという今考えればまことに無謀とも言える作戦に従事しておりました。この部隊の全貌は、総員3,121名、派遣地域は、沖縄、台湾、及びフィリピンでありまして、このうち1,704名が戦没致しました。そしてこれらの部隊に編入された隊員の大部分は、17・8才の少年達でありました。このことは、秘密部隊ゆえに戦後も全く国民に知られることもなく、現在一隻の舟艇も現存しておりません。又これらの舟艇が秘匿されていた洞窟も、私共の知る限り殆ど姿を消しております。当時宮古島に駐屯していた私共の部隊海上挺進第4戦隊は、終戦までの間に計23名の戦没者を出しつつ市内荷川取地区一帯に47隻の舟艇を10数個の洞窟の中に秘匿待機しておりました。その後最近に至って付近一帯が開発埋め立てられる中で、幸い元海岸線に2個の洞穴が残されて今日にいたっております。しかしながら、御地の発展とともに早晩他の洞窟と同様の運命を辿ることは容易に想像されるところでございます。もとより私共いたずらに戦中を回顧し、感慨に耽るつもりなど毛頭ございませんが、できるならば59名という大きな犠牲を払って洞窟の建設に当った基地大隊の労苦を後世に伝えるとともに、沖縄、比島での作戦

で戦没した多くの隊員達の存在の痕跡をたとえ国内の一か所でも地上に残しておいてやりたいという気持ちに駆られております。又同時にあの戦争を風化させることなく二度とあのような悲惨な状態を繰り返してはいけないという歴史の証人として、この洞窟に残って貰いたいという願いで一杯でおります。かたわらこの洞窟の存在が歴史に埋もれた事実の発見として、いささかでも御地の観光の一助にでも役立てていただければ望外の幸せに存ずる次第でございます。

私共まことに非力でありまして、現在のところ洞窟の付近に慰霊碑を建設させて頂くことを計画しているほか格別洞窟について手段を講ずることが出来ませんが、市長殿を初め市民の皆様の暖かいご配慮により、この残された洞窟が何等かの形で保存されますことを心から念願し陳情申し上げます。

平成８年１２月１８日

元陸軍海上挺進第四戦隊員

住　所　岐阜市下尻毛四八八
陳情書提出担当者

氏　名　中尾藤雄

平良市長　伊志嶺　亮　殿

陳情書は元隊員46名、遺族７名から53通提出されています（筆者）